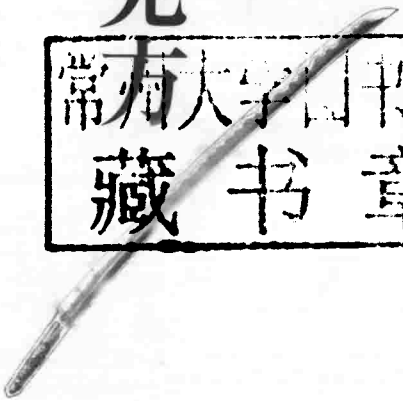
刃物の見方

岩崎 航介 著

慶友社

刃物の見方

岩崎 航介 著



常州大学图书馆
藏书章

慶友社

刃物の見方

二〇一二年九月六日　第二刷

著者　岩崎　航介

解説　朝岡　康二

発行　慶友社

郵便番号　〒一〇一―〇〇五一
東京都千代田区神田神保町二―四八
電話　〇三―三二六一―一三六一
FAX　〇三―三二六一―一三六九

印刷・製本／亜細亜印刷（株）

© Iwasaki Kousuke 2012. Printed in Japan
ISBN978-4-87449-069-3　C3057

〈解説〉岩崎航介と『刃物の見方』

朝岡康二

岩崎航介は明治三十六年（一九〇三）に新潟県三条町二ノ町の金物卸業の次男として生まれた。糸魚川中学校から新潟高等学校に進学した秀才であったが、卒業後は家業を手伝いながら刀剣研ぎを学んでいたという。金物卸業の家に生まれた者らしく早くから日本刀剣に関心をよせていたのである。

年譜によれば大正十四年に三条を離れて、縁あって神奈川の逗子開成中学校の講師となり、同年東京帝国大学文学部国史学科に入学する。本書にも述べられているように、翌十五年には刀剣師に入門して鍛刀法を学んでいる。

この年には、後に皇国史観で知られた神社祠官家出身の神道史学者・平泉澄が国史学科助教授に任ぜられた。当時は大正期の自由主義的な風潮に対して「日本主義」が声高に喧伝されるようになる時代であった。こうしたなかで、岩崎は平泉の下で刀剣秘伝書などの史料収集とその分析に従事したらしいが、平泉の影響をどの程度受けたかは明らかでない。昭和三年には国史学科を卒業して大学院に進学するが、同五年には退学しているから（同年に平泉は欧米外遊に出て、帰国後に過激な国粋思想家となる）、岩崎には人文的な国史の研究は満足できるものではなかったようである。

昭和七年に再び東京帝国大学を受験して工学部冶金学科に再入学（同年に冶金学科教授・俵国一は定年退官している。後任は海軍造兵少将の吉川晴十であった）、昭和十年に卒業して大学院に進学する。文献を主に扱う歴史に飽き足らないで工学的な研究に転進した例は、当時においても稀有なことであったかと思われる。

以後、大学院を修了すると同学科副手になり、国策に繋がる大陸資源調査会を組織して蒙古の地下資源調査に従事するなどしたが、同時に年来の日本刀の研究も推進していたようである。

敗戦の色濃い昭和二十年五月に副手を辞職して三条に帰省、刀剣鍛錬所を設けて作刀を始めるために奔走する。同年八月に戦争終結。ポツダム緊急勅令にともない刀剣関係の活動を停止。同二十二年、三条製作所を設立し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て実用刃物の研究、剃刀の製造を開始、剃刀研究者としての岩崎航介がここに誕生した。

同二十八年に、通産省より「玉鋼を使用した優秀打刃物の製法」について科学研究補助金を得る。以後、日本製鋼・室蘭製作所（付属施設に堀井胤吉を初代とする「瑞泉鍛刀所」がある）から玉鋼の提供を受けて、それを用いた高炭素刃物の実用研究に没頭する。このことは日本精神を象徴する玉鋼を民間刃物にひらく、いわば「日本精神の平和利用」を目指すものであったといえる。それは同時に刃物製作は科学に裏打ちされるべき、とする工学研究者の信念を示すものでもあったのであろう。

これ以後、岩崎は三条製作所を拠点に剃刀に使う高炭素鋼の研究・製造に従事して、子息・重義氏に優れた鍛冶技術を備えさせて製造実務の要とした。こうして「三条製作所・岩崎」の剃刀は優秀製品として理髪業界に広く知られるものになったのである。

その後に岩崎は、あらためて正倉院の古代刀剣の調査などに参加して、刀剣についても発言をするようになっていく。すでに本書でも指摘されているように、岩崎は早くから小説家・吉川英治の知遇をえて、小説におけるチャンバラなどについて刀剣専門家の観点から意見を述べるなどしていたが、国史専攻でもあったからか、文章表現にも長じていたようで、戦前から『文芸春秋』に寄稿するなど、文筆家の側面も併せ持っていた。

以上のような岩崎航介の仕事を検証してみると、『日本刀の科学的研究』を著した和鋼・日本刀研究の大家・俵国一を受け継いで、俵が確立した顕微鏡を用いた金属組織研究の実用化と金属顕微鏡の利用普及に努めて、それまで体験的な知識に頼っていた刃物製造法の近代化に大きな足跡を残しており、そのことを高く評価しなければならない。それはもちろん桶谷繁雄が「達人」と評した岩崎航介という人物の能力・個性・気質がなしたことに違いなかったが、帝国大学大学院に学び、さらに副手まで務めた研究者が地場産業に直接に結びつく場で仕事をすることなど、当時はほとんど考えられなかったから、そこには敗戦と復興という時代の激変が大きな影響を

与えていると思われる。

信濃川と五十嵐川の合流点に位置する三条は、早くからこの地域の交易の中心として大きな役割を果たしてきた。五十嵐川に面した川港である三条は、ひとつには信濃川から魚野川を経て三国峠に至り、あるいは五十嵐川を遡上して下田村から会津に抜ける、蒲原平野と魚沼・只見山地を結ぶ物資流通の結節点であったからである。近年までみられた雁木を連ねた町家の並びは、いかにも越後らしい鄙びた風情を残すものであったが、それは同時に近世以来、比較的に自由な気風を持つ商人町として栄えてきた名残でもあった。

古くは他所と同様に上方下りの呉服・木綿商の集散地であったといわれているが、何時のころからか金物商いが増加していったようである。今ではその具体的な過程は明らかではないが、天保期に至るまでに江戸にさかんに釘荷を送っていたというから、いわゆる江戸十組問屋の下に産地問屋が成立したことになる。釘荷は、前述の魚野川を遡上して三国峠を肩荷で越えて、上州・倉加野から利根川水運によって千住まで運ばれたという。当時、周辺農村地域には冬場の農閑稼ぎに釘を打つ農家が多く、その釘が三条に集まったのである。

天保の改革以後、株仲間の解体ないし弛緩が生じると、各地で比較的自由な遠隔地交易がおこなわれるようになり、それにともない農村地域への行商が活発化していった。それは近代に入るとさらに盛んになって、「明治時代は行商の時代」といわれるほどになったのである。

こうしたなかで、三条から関東地方に運ばれる鉄物商品は飛躍的に増加して、その商圏は、江戸ばかりではなく北は上野から東は常陸まで利根川水運に繋がる広い地域に及んで、三条の問屋のなかには「関東屋」という屋号があったほどである。

その時代の農村向けの代表的な商品は草刈鎌で、この結果、関東台地の畑作地域の鎌は、越後からもたらされ

る移入品が急速に地物に取り替わり、この地域の地鎌産地は常陸石岡・上総久留里・安房館山などわずかな例外を残して瞬く間に消滅してしまった。

鎌の形態には使い方にともなう地域的な相違があった。そしてひとびとは手になじみ、慣れ親しんだものしか使わなかったから、三条の行商人たちは、越後産の鎌を遠隔地向けの商品に仕立てるために、関東各地の在来の鎌型を集めて三条に持ち帰り、それと同じ形に作らせて売る方法で販路を広げていった。そのために各地の鎌型を集めた「鎌形帳」が作られたほどである。

このように三条の商いは、他所にはない固有の特産製品を売り広めることで成り立っていたのではなく、売り先に伝承する製品を実用的・合理的に複製・製造して商うという、いわば製造技術と行商能力を武器にしたものであった。

また、江戸末期から明治時代にかけて、おそらく多年にわたる釘鉄商いを通して生まれた関わりを基にして、鋸・鑿・鉋などの大工道具類を大消費地である江戸・東京に売り広めていった。その結果周辺地域に、鋸ならば脇野、鑿ならば与板、鎌ならば月潟といった、特定品目の産地を生み出すことになって、それらは近年まで引き続き信濃川流域の鉄物産地として継承されてきた。

このように三条をへて出荷される鉄物製品は、江戸・関東から始まってやがては全国的に知られるものになっていったが、その一方で三条の町には、近在農家に鍬先を貸し付ける（春先に貸付けて収穫後に回収、冬場に修理再生して再び春に貸付ける）貸鍬商人も増加して、なかには会津本郷あたりまでも商圏に含むことさえあったという。越後の「貸し鍬」慣行といえば、高田城下や柏崎などでは鍛冶屋が営業するものであったが、三条では商人があつかって比較的に広域を対象とした点に特徴があった。

さらに第一次世界大戦下の好景気時には、ヨーロッパ勢の空白に乗じてアジア各地に刃物を輸出する勢いで

あった。本書にも記述されているように岩崎の生家も、この輸出ブームに乗って販路を広げた「岩権」と称する刃物問屋であった。当時の輸出は神戸の貿易商社を通じたもので、三条ではナイフ製造に従事する鍛冶屋が急増して、最重要産品となっていた。しかし、戦後はヨーロッパ勢の巻き返しに加えて、昭和二年のいわゆる「金融恐慌」に直面することになり、同年、岩崎又造の「岩権」は加藤文次郎の「関東屋」と合併して「三条金物株式会社」となる。本書で「親の仇・ゾーリンゲン」と繰り返しているのは、この間の事情をあらわすものである。また、関東大震災の復興に際しては、東海道の交通が途絶したために関西から東京に向かう物資が日本海側を迂回することになり、三条はそれらの中継地点となって問屋機能がさらに充実して、東京の需要に深く繋がるようになる。

真空管ラジオが普及すると、それにともなって修理用のヤットコが大量に必要となり、量産される。さらに第二次大戦前後には、北洋漁業などの水産物加工が重要になって、それに用いるマキリなどの包丁類が量産されるようになった。

このように様々の契機を通して三条の金物生産は拡大し、問屋町の周辺には鍛冶屋が次々に生まれて、特定製品に限らない、ありとあらゆる鍛冶製品を取り扱う東日本の代表的な産地になっていったのである。

近世以来の伝統を伝える鉄器の産地には、三条のほかにも堺・三木・小野・武生・関などがあり、それぞれ個性的な発展を遂げるが、三条を中心とする越後の金物産業は、なかでも特に多彩な分野を含むものとなり、それを基にして、戦後は工業化の急速に進んだところでもあった。

伝承的なものから工業的なものへ展開するためには、しっかりした技術的背景を持つことが不可欠であるが、その点でこの地域は恵まれていた。

例えば戦後、いち早くアメリカからステンレススクラップを輸入して、その加工に進出した燕の明道金属

（現・明道メタル）がある。ここには、東北大学の本田光太郎など中央の優れた金属学者がたびたび訪れており、第一線の研究者と連携して最新の研究成果を地場の技術に結びつけた点に大きな特徴があった。岩崎航介もそうした研究者グループに属して、というよりも、研究者と地場を仲介する重要な役割を担っていたようにみえる。

いいかえれば三条・燕は、早くから東京帝国大学・東北帝国大学などの金属研究者と強く関わりを持つことができて、その見識を地場産業に結びつけた稀有な地域ではなかったかと思われる。そのなかにあって岩崎は、冶金工学の理論と、研ぎや作刀の研鑽で獲得した実際技術とを結びつけることによって、地場の近代化を着実に推進したのである。

岩崎航介は、昭和四十一年七月に「三条金物青年会」主催による第一回商品開発講座において、当時の三条刃物の状況やその改善策を実地に則して説く「刃物の見分け方」の講演をおこなった。この講演内容は昭和四十一年十二月より『金物ニュース』に連載されたというが、それが本書の巻頭の「刃物の見分け方」である。

昭和四十年代といえば、東京オリンピック開催後にあたり、日本は高度経済成長路線をひた走っていた。それは日本全体が農村型社会から都市型社会に変貌していく過程であり、ひとびとは、新しい生活スタイルの実現を目指して消費活動を急速に拡大していった、そういう時代であった。

求められた新しい生活スタイルは、専業農家の減少、サラリーマンの増加、工業規格品、なかでも家電製品や自動車のような耐久消費財の普及などによる、便宜的・合理的、あるいは画一的な日常生活の実現であって、雑多な日用品に対してもこの新しい生活文化に見合った様式が強く求められるようになってきた。このような潮流は、当然ながら実用金物を製造・販売してきた三条・燕などの地場産業にも大きな影響を与えることになった。新しい製品の開発や普及には、在来の問屋制に基づく伝承的な商品・生産管理・販売方法では間に合わなくなり、

地場産業にも近代化が求められたのである。

この点で、長年にわたって理論に基づく実験と実践を積み重ねて、実用刃物の理想を求めてきた岩崎の、「刃物の見分け方」に示された指導はまことに適切であった。ここで語られた問題点とその改善方法は講演を聞くひとびとに多大な示唆を与えたことであろう。

それからさほど経たない昭和四十三年に、岩崎航介は癌のために死去した。

そして、翌四十四年二月に「三条金物青年会」の設立十周年記念事業として、地元の野島出版より出版されたのが本書である。

出版に際しては、それまで様々な機会に書かれたエッセイが追加されて、実用刃物・剃刀に限らず、作刀法・自らの一代記・玉鋼・刃物材料の一般知識に及ぶ実に幅広い内容を持つものにできあがった。そのような編集の工夫があってのことか、『刃物の見方』は多くのひとびとに歓迎されてたちまち売り切れ、同年六月には再版されている。

さらに昭和四十七年に三版が発行されたが、この時には、新たに天然砥石についての「名倉砥の現地調査」および「本山砥の現地調査」が追加された。本書に所収されている「剃刀の返品研究」は、先に述べた科学研究補助金による調査研究に基づくまことに秀逸なエッセイであるが、ここでは刃物と研ぎ・砥石の関わりの重要さが指摘されており、名倉や本山の現地調査はこの観点からおこなわれたものであると思われる。そのうえで岩崎は上質の剃刀砥を「岩崎選」として頒布することもおこなったようである。

それからすでに四十数年の歳月が経過した。

そのあいだに様々の出来事が生じて、三条の鉄物製造を取り巻く環境は大きな変貌を遂げたが、なんといって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も生活の場での刃物の必要が変化した。髭剃りには電気剃刀や替え刃式の使用が優勢になって、理容師すらめったに剃刀を研いで使うことがなくなった。大工道具の方も電動化が進んで、鋸は使い捨てになり、鉋も替え刃が普及して、鑿はほとんど使われなくなった。スーパーであつかう肉・魚は切り身になって、野菜は刻んで売られ、若い世代の家庭には包丁が一本もない、ということもある。百円ショップではステンレスの打ち抜き刃の鋏が売られている。

三条の周辺にはいわゆるショッピングセンター向けの巨大な流通倉庫がいくつもあって、この地域の問屋商いは決して衰えていないようにみえるが、経済のグローバル化の下で鍛造工場・機械工場は大変に難しい経営を強いられており、地場産業は大きな曲がり角に来ていると思われる。

しかしその一方で、規格化された量産品が生活を覆い尽くす今日の状況にあって、なかなか生活の糧にはなりにくいナイフ造りや鍛刀をめざす若者が増えているともいう。手造りに対する関心・興味があらためて生じているのであろう。そんななかで、この一〇年ほど、岩崎航介の子息・重義氏を中心にして大工道具・刃物造りの鍛冶職が集まって、伝統技術の紹介と後継者育成をかねた「三条鍛冶道場」が続けられてきた。はじめはまったくの自主的活動であったというが、近年は行政の協力によって立派な施設が設けられるなどして、その活動はいっそう活発になり、講習会には全国各地から大勢の参加者が集まるようになってきた。また、これを通じて将来をになう若い技能者も育ってきたといい、「金物の町・三条」の象徴として機能するようになってきた。こんな形でも岩崎航介の志が受け継がれているのである。

もちろん、今日、日本のもの造りをとりまく状況はなかなか厳しいものがあり、そう呑気なことばかりいっておられない。そんな時に本書が復刻されて、敗戦をくぐりぬけて生きた「なにごとも顧慮することなく、この道一筋に一生を送った」（桶谷繁雄の「序」より）「達人」の教えに親しく接する機会が得られることは幸いである。

岩崎航介遺稿集

刃物の見方

三条金物青年会刊行

ありし日の筆者

序

このたび、畏友故岩崎航介君の遺稿集が出されることになったのは、古い友人の一人として、私は大変に嬉しく思います。同君は、東京帝国大学工学部冶金科の学生としては、既に歴史学を専攻する文学士と云う肩書を持つだけに、特異な存在でありました。いわゆる長者の風格とでもいえるものを、既に持っていました。同君と私が特に親しくなったのは、昭和八年夏の釜石製鉄所における実習の時であって、その交際は同君の死に至るまで絶えませんでした。戦争中は満州の広野を資源調査のために長期に亘って旅をし、その間、病を得て死にかかったりしたのですが、私は東京にいて、ただあわてるばかりで何の手も打てなかった事など、思い出として残っています。古刀の復原に全力を集中し、故郷三条の町に刀剣鍛錬場を設立したのも、この戦争中でした。戦後私がフランス政府の招きで二度目の渡仏をした時、私を経済的に応援してくれた事も忘れられません。

同君の一生をかけた仕事は、日本刀の研究でありました。何か別な事をしているように見えても、必ずやそれが日本刀につながりを持っていたのでした。剃刀の製作も、日本刀にたどり

つくための一つの手段であったと私は考えています。そして、何も顧慮することなく、この道一筋に一生を送った同君は、実に幸福な、満たされた生涯を送ったと云う事ができましょう。特に晩年に、正倉院御物の中の刀剣の調査は、同君の最も得意とする分野の知識を十分に活用できたものだと私は信じております。

同君は、貞節なる夫人と、孝行なる子供さんに囲まれ、まだまだ活動できる年であるのに逝かれてしまいましたが、私は今なお在るが如き気持を抱いております。そして、この遺稿集が、同君を慕う人々の手許におかれ、常に読まれる事を嬉しく思います。どうか、この岩崎航介と云う「達人」の事を、長く忘れないで頂きたいと思い、友人として序を書かせて頂きました。

昭和四十三年歳末

東京工業大学教授
工学博士　桶谷繁雄

刃物の見方＊　目　次

〈解説〉岩崎航介と『刃物の見方』　朝岡康二

刃物の見方——岩崎航介遺稿集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com